

特集 芦屋を彩るアーティスト

2016年に『細雪』に登場する蒔岡四姉妹をモチーフとした写真展『てりはのいばら』を開催した須藤絢乃さん。谷崎潤一郎記念館での個展は、2013年の作品展『幻影』(2014年キャノン写真新世紀優秀賞受賞)に続き2度目。

きっかけは、パリと変身願望

山手中学校の卒業生である彼女にフォトグラファーになろうと思ったきっかけを尋ねると「京都芸術大学院生の時に、フランスのパリで毎年開催されている写真の展示会『PARIS PHOTO』に行ったのがきっかけです。それまで私が日本で見た写真の固定概念を変えるような自由な発想の作品が数多くあり、写真が持つ表現力の可能性を感じました。私にも日本の文化を取り入れた面白い作品が作れるはずと思い撮り始めました。」

セルフポートレート(写真家自身を写す写真)を始めた理由は「昼夜を問わず撮りたいと思った時に、いつでもモデルになれるのは、自分だけなので。あと、もともと私に変身願望があったので、それを作品で表現できればと思いました。」

『てりはのいばら』写真展

「谷崎作品はファンが多いので中途半端な作品は作れないと思いました。細雪が描かれた時代を表現するため、着物探しからはじめました。小さい頃から私をととても可愛がってくれている祖母は、昔大阪の堀江新地で御茶屋を営んでいましたので、色々な着物や小物を持っていました。その中から、四姉妹それぞれのイメージに合うものを選びました。撮影は6月、8月、10月にこちらの記念館や富田碎花旧居(実際に谷崎が住んでいた打出の家)で行いました。それから写真を選び、作品として完成するまで数カ月かかりました。」

芦屋と作品への影響

「12歳から20代前半まで朝日ヶ丘町に住んでいました。山手から海を眺める景色はとても綺麗で、お洒落なお屋敷を眺めながら通学していると、どこかでバイオリンやサクスを練習している音声が聞こえてきたのを覚えています。あと、山並みに屋敷が立ち並ぶ景色は、夜になると白熱色の照明が輝き、星のようでもとても綺麗。まるで、稲垣足穂(作家)の小説に出てくる世界だと思いました。こんな素敵な環境の中で過ごしてきたことが、私の作品にも影響していると思います。」



「今回、細雪の蒔岡四姉妹を演じるなかで、谷崎作品が描く女性はとても魅力的だと感じました。また谷崎作品をモチーフとして撮影したいと思います。」と笑顔で語ってくれました。



芦屋×須藤絢乃
フォトグラファー

須藤 絢乃【すどう あやの】

学生時代は芦屋で過ごす。自身や被写体の性別を超えた変身願望や理想像を写真に納め、絵画と写真の狭間にあるような平面作品を発表。2011年、ミオ写真奨励賞審査員特別賞。2013年、ニューヨークの国際写真美術館に作品が所蔵される。2014年、キャノン写真新世紀優秀賞を受賞。現在、国内外の展覧会などで活動中。